

女性の経済活動と女性観

—カンボジア女性小売商の事例研究—

日下部京子

< キーワード >

カンボジア 零細小売商 女性観 市場開放政策 家庭内ジェンダー関係

< 要 旨 >

市場開放政策は、一方において女性に過大な負担を強要するが、女性の雇用を創出し、女性の独立した収入を増やすことで、女性に利益をもたらす面もあることが報告されている。カンボジアでは、1989年の市場開放以来、多くの都市女性が零細な小売業に参入した。カンボジア女性は伝統的に財布のひもを握り、家庭内でかなりの決定権を持ってきた。独立した収入を得ることにより、この女性たちの家庭内での地位はより向上したものと期待される。事実、彼女たちは、自分の商売に満足し、成功していると思っている。このような自己イメージは、女性が小売業を営んで家計を支えることが、カンボジアの女性観にも合致することで、より強められている。しかし、女性の経済力の向上は、必ずしも彼女たちの地位向上にはつながっていない。女性の家庭への経済的貢献が大きくなっても、家事は依然として女性の責任になっている。女性は零細小売業という社会的地位の低い職業に甘んじて、家族を経済的に支え、夫の社会的ステータスを維持、向上させる役割を果たすことが社会と家族から期待されている。カンボジアの女性観は女性の経済的貢献を積極的に評価することで、女性に対して経済的な重圧と社会的に低い地位を抵抗なく受け入れさせる、「名称のない力」となって働いている。

はじめに

構造調整政策や社会主義から資本主義への移行経済下での政策などにみられる市場開放政策が、女性に及ぼす影響については、多くの報告がなされている。市場開放が女性にとってプラスの影響があるのか、マイナスの影響があるのか、議論は続いている。女性の独立した収入が増えたことはプラスの影響とされているが、女性が独立した収入をえることによって、彼女たちの家庭内及び社会での地位は実際に向上するのだろうか。本稿は、カンボジアの女性小売商を事例にとりあげ、この疑問に対する回答を試みる。小売業は、カンボジアの市場開放下で最も成長した業種の一つであるとともに、カンボジアにおいて女性の職種とされている分野である。市場開放下、塩一袋から一軒の店を持つまで商売を拡大した女性もいるし、夫を含めた

家族全員を自分の商売の収入のみで養ってきた女性も多い。この小売業を営む女性たちは、商売をすることでその地位を向上させることができたのであろうか。

研究・調査法

本稿は、1997年初頭にカンボジアの首都プノンペン市において零細小売業を営む女性を対象に行った調査が元になっている。調査対象者は、商店主、市場に売り台をもって売っている女性、市場の入り口や通路にすわって売っている女性、公道にすわって売っている女性、行商の女性と多岐にわたった。カンボジアの統計局の調査によると、1997年時点でプノンペン市には、約123,000人の卸し売り及び小売り業者がおり、内女性は約88,000人である[NIS 1998]。市内の小売業者から任意に回答者を抽出す

表1 回答者の小売業形態と、配偶者の有無、及び配偶者の職業

	配偶者が居る場合、その職業			配偶者が居ない場合		合 計
	公務員* ¹	自営業* ²	その他* ³	死別・離婚者	結婚経験なし	
商 店	7(25.0)	16(57.1)	1(3.6)	2(7.1)	2(7.1)	28(100.0)
市場 I* ⁴	31(40.3)	12(15.6)	15(19.5)	10(13.0)	9(11.7)	77(100.0)
市場 II* ⁵	15(28.8)	8(15.4)	8(15.4)	15(28.8)	6(11.5)	52(100.0)
行 商* ⁶	11(12.0)	8(8.7)	39(42.4)	29(31.5)	5(5.4)	92(100.0)
合 計	64(25.7)	44(17.7)	63(25.3)	56(22.5)	22(8.8)	249(100.0)

*1: プノンペン市及び中央政府役人、教師、警察、軍人を含む。

*2: 57.1%が小売業。他に、仕出しなどのサービス業を含む。妻とともに、または別に商売をしているケースを含む。

*3: 個人の小規模な商売への被雇用者、肉店労働者、及び在宅者(現金収入なし)を含む。

*4: 公設市場に売り台をもち、日用雑貨・衣料品・化粧品などや、時計や金など高価なものを売っている女性。

*5: 公設市場に売り台をもち、生鮮食料品(野菜・魚・果物)を売っている女性。

*6: 公設市場の通路や入り口の地べたで売っている女性、街路の一定の所で売っている女性、売り歩く女性、低所得者住宅地内で売っている女性。生鮮食料品を売る。

ることは不可能であったため、本調査では、いくつかの区域を選んでその中から調査協力者を探した。市場の商人に関しては、公設市場4ヶ所(全26の内)から選択した¹⁾。扱い商品に応じて市場をいくつかの区域に区切り、その中でインタビューに応じることに同意してくれた女性を調査対象者とした。同様の方法で、商店主の調査対象者は主要商店街4ヶ所から選ばれた。また、行商の女性に関しては、彼女たちが多く住む低所得住宅地3ヶ所において、そのコミュニティー・リーダーの紹介で調査対象者が選ばれた。市場からは168人、商店からは28人、行商者からは53人、計249人の女性小売業者にインタビューした。商店と市場においては、その職場で、行商者については、その自宅で、ガイドラインにそって直接面接した。インタビューは通訳を介さず、クメール語で直接行われた。調査内容は、1979年のポルポト政権後の彼女たちの履歴及び小売業を始めた理由、自分の商売をどのように運営し、どのように見ているか、また、1979年以前の両親の職業、現在の配偶者の職業(表1)及び商売と家庭における役割分担などを聞いた。

調査の焦点は、彼女たちが家計収入へ貢献することによって、家庭内及び社会での地位が向上するかどうかを検討することにある。地位の向上をはかるには、多くの指標があるが、本稿では、すべての指標をカバーすることができないため、特に、女性の家計収入への貢献が夫婦の家事分担に変化をもたらしたかどうかの主眼をおいた。従って、総合的な地位の向上について、この調査データのみで断定することは難しいが、何らかの示唆ができるものと期待する。調査の時間的制約のため、生活時間調査は本調査では行うことができなかったが、家事分担について女性自身が感じている負担をもとに考察した。社会的地位は、職業のステータスで考察した。また、彼女たち

の経済的な貢献が地位向上につながらない原因をカンボジアの女性像に探った。女性が社会的に期待される役割に縛られて、女性の経済的な貢献が正当に評価されず、地位の向上につながっていないと考えられる。

1. 市場開放とジェンダー関係

(1) 市場開放下における女性の状況についての議論

構造調整政策や社会主義から資本主義への移行経済下における女性の状況についての事例研究については、プラスの影響とマイナスの影響と両方事例が紹介されている。女性に対してマイナスの影響は、特にアフリカ及び中南米の事例で、市場開放政策が経済危機下で行われた場合について報告されている[Haddad et al. 1995, Vickers 1991, Tanski 1994]。市場開放政策の下、政府の教育予算が削られ、経済危機下、世帯収入も減少した中、男子の教育が優先され、女子の中途退学が増えた。また、女性は出産や育児で保健サービスに頼ることが男性よりも多いので、保健予算の削減により、女性は男性よりも多く影響をうけたといわれている。Baden [1993]は、ペルーとジャマイカの事例で、女性が市場開放後、就業条件の悪いインフォーマル・セクターに以前よりも、そして男性よりも多く参入していることを指摘している。Pelzer [1993]はベトナムの事例で、Aslanbeigui et al. [1994]は東ヨーロッパの事例で、社会主義から資本主義への政治的経済的移行とともに、女は夫を支え、従うべきという通念が「復活」したと指摘している。天野 [1995: 41]は、カンボジアにおいて市場開放後、公的な保育施設が軒並み閉鎖されるなど、女性が不利な影響を真っ先に被ったと語っている。

その一方で、女性に対してプラスの影響も報告されて

いる。この多くは市場開放に伴って経済全体がよくなったことと、女性の就業機会が増えたことから生じている。特にアジア太平洋地域の国々では、経済全体の成長が世帯収入を向上させ、それによって、女性の健康や教育機会が改善された [Corner 1993, Aslanbeigui et al. 1994]。ドミニカ共和国においては、輸出加工地区における女性の就業機会の増加が、女性の独立収入を増加させた [Haddad et al. 1995]。

このように相対する市場開放に対する見解は、それを基にしている事例が経済危機下であるかどうかの差もさることながら、女性の地位に関する基本的な視点の相違からも生じているといえる。ネガティブな影響を論じる前者の多くは、市場は現存するジェンダー関係をベースにし、利用して発展するものなので、市場原理の強化は現在の不平等なジェンダー関係をより強化するにすぎないと考えている。一方、プラスの影響を論じる後者は、女性が市場に参入することで経済力をもち、このような経済的・物質的変化が認識・ジェンダー関係の変化につながっていくと考えている。

と同時に、女性の独立した収入が自動的に女性の地位の向上につながらないこともまた、多く指摘されている [Razavi and Miller 1995, Mayoux 1992, Sen 1996]。Elson and Pearson [1984] は、女性がいくらか家計に貢献をしたとしても、一家の稼ぎ手として社会的に認知されないと指摘した。なぜならば、誰が「一家の稼ぎ手」であるかは、経済的貢献によって決定されるのではなく、家庭を社会に対して「代表」する役割によって決められ、その役割は通常男性に求められるからだ。

本稿では、カンボジアにおいて、市場開放が女性にどのような影響を及ぼしたかを女性小売業者を事例にとって考察し、前述した市場開放が女性に及ぼす影響についての議論に貢献する。市場開放下、小売業を営むことで、ある女性たちは商売も大きくすることができ、家族も養うことができた。その意味では、経済的変化は確かに女性の経済的自立を助け、女性の家庭内での地位向上につながっているかもしれない。しかし、その向上は社会通念としての女性観によって制限をくわえられている。そして、この女性観は現状のジェンダー関係を支え、かつ女性に家庭内外でより多くの負担をおわせることで、市場の強化を支えるものになっていると論じる。本調査では、カンボジア女性でも首都プノンペンの小売業者、しかもごく限られた女性のみしかインタビューすることができていないので、一般化するにはさらに多くの調査が必要であるが、女

性の経済活動と女性観の関係に対して何らかの示唆ができることを期待する。

(2) 力関係としてのジェンダー関係

本稿は、家庭内における男女の社会的関係—ジェンダー関係—に焦点をあてている。ここで、ジェンダー関係の概念について、論じておきたい。Agarwal [1994: 51] はジェンダー関係を「男女間における労働分担、役割分担、資源分配を含む行為、思考、象徴に現出し、男女に異なった能力、態度、欲望、性格、行動パターンなどを帰属させる、男女間の力関係」と定義している。つまり、ジェンダー関係は基本的に力関係である。「力」は、他者に対して強制する権力としてのみ現出するわけではない。Lukes [1974] は、力を3分類している。1つは、他者の意志に反した結果を実現することのできる力。決定権を持つ者が明らかな場合の力である。2つ目の力は、議題を定める力である。権力者の権威を侵害しないもの、社会通念に反しないもののみが議論の対象となるように、限定する力だ。3つ目の力は、抑圧者と被抑圧者それぞれの欲望、欲求、嗜好を形成し、両者ともに現存の状態を受容し、あつれきを避けるようにする力である。

議題を限定し、それに対する不満を抑える「力」は、例えば、家庭内での男女の役割分担を規定するのに働いている。女性が家事をすることは、社会通念として、あまりにも当然のことのよう受け止められていて、通常議論されることはない。そして、女性自身の意識の中でも、家事を受け持つことによって自分が必要とされているという自己の存在理由となっている面もある。Agarwal [1994] は、このような「力」を Bourdieu [1977] のいうところの doxa と合い照らして論じている。Doxa は、自然または自明な社会秩序として一般に受け入れられ、議論の対象とはならない事柄、「議論されない、名称のない、異議や疑問の余地もなく受容されている」事柄である [Agarwal 1994: 58]。通常「伝統」とよばれているものは、これにあてはまる。

ジェンダー関係には、この3つの力—目に見える力のみでなく、力の働きが被抑圧者によっても自覚されない「名称のない」力も含めて—が働いている。本稿では、カンボジアにおける女性観がこの「名称のない」力となって、家庭内のジェンダー関係に働き、女性の経済力にかかわらず、彼女たちを低い地位にとどめていることを、女性小売商の例をとって実証したい。

2. カンボジアの市場開放と女性

(1) 過去20年のカンボジア経済

カンボジアは1975年から1979年にかけてポルポト政権下に入った。ポルポト軍は、極左共産主義思想の下、全国民を農村に強制移住させ、「共同農場」での強制重労働に従事させた。この期間、虐殺、過労、栄養失調、病気で死んだ人数は、100万人を超えるといわれている [Mysliwiec 1988]。ポルポト政権下、個人の財産は没収され、経済取引活動は一切禁止された。

ポルポト政権とそれに先立つ戦争は、未亡人を多く生み出した。1979年にポルポト政権が崩壊すると同時に、未亡人は子供を養うため、夫のある女性も家族を養うために、まだ通貨もないブノンペンで物々交換から小売業をはじめた。多くの女性は、この時期に小売業を始め、今にいたっている。

1979年、ベトナムの後押しで政権を獲得したカンボジア人民共和国（ヘン・サムリン政権）は、ベトナムの指導の下、社会主義路線を敷いた。しかし、物資窮乏、及び行政力の不足から、完全な経済の政府統制は実施不可能として、個人・家庭レベルの経済活動は許された [Vickery 1986]。したがって、1979年以降、女性の零細小売業は発展した。

1980年代後半に入り、社会主義が破綻をきたし、ソ連の経済援助が滞るのを機に、財政収入の大きな部分をソ連の援助に頼っていたカンボジアは経済の路線変更を迫られた。1989年にカンボジアは正式に個人の経済活動を認め、市場開放政策が始まった。

1989年の市場開放以降、カンボジアはインフレに苦しみ、1991年にはインフレは200%にものぼった [UN/ESCAP 1995]。公務員の実質賃金はインフレの影響で、無価値なまでに下がったうえ、未払い、延滞が続いた。また、政府は財政削減のために公営企業の民営化、または閉鎖を実施し、それが失業に拍車をかけ、外資導入が進まない中、雇用は伸び悩んだ。その一方で、GDPは増大した。この増加に大きく貢献したのが、サービス業や小売業を中心とした第3次産業の伸びだった。

(2) 女性の小売業参入

このような経済状況の中で、家計を支えるために多くの家庭でとられた選択は女性の小売業参入だった。公式データは存在しないが、本調査では、1979-80年に小売業を始めたのは全回答者の36.9%、1981-89年の9年間の

社会主義下に始めた人は、全体の22.9%、90-97年の市場開放下に始めた人は40.3%で、ポルポト政権崩壊直後と市場開放後に多く参入している傾向が認められた。女性が小売業を選ぶのはいくつかの理由がある。小売業は「伝統的」に女性の仕事とされていること、他に雇用先がないこと、少ない資金でも始められること、家事との両立がしやすいことなどが理由としてよくあげられている。女性たちは、限られた選択肢の中で小売業を選んだが、いざ商売を始めると、彼女たちは自分自身の采配で、自立して商売をしている。たとえば、日常的な決定は、回答者249人中230人は自分でするといい、場所の移動や扱い商品を変えるなど、まとまった投資の必要な決定についても249人中226人が自分に決定権があるという。決定権がないのは、若年の独身女性、または母親やおばなど、年上の女性と一緒に商売をしている女性である。また、商売から得た収入をどのように使うかも、女性たち自身のコントロール下にある。若年の独身女性のみは、収入の管理はさせてもらえず、父母が全収入をあずかるのが通常だ。商店に多いパターンである、配偶者とともに商売をしているケースについても、女性たちはかなりの決定権及び、収入の処分権をもっている。本調査でも、配偶者と一緒に商売をしている女性で、決定権がなかったのは、商売人の夫の家族に嫁入りした、以前に商売の経験のない女性のケースのみであった。

女性たちの商売の収入は、家計費の大部分を支えている。本調査では、配偶者のいる回答者の47.6%は、家計費の全額を支えていた。この他に40%は、家計費の「ほとんど」を出していると言っていた。「ほとんど」は、食費など生活に不可欠な日常経費は、女性の収入によってまかなわれているが、男性も時折貢献し、それは、家族の貯え、非日用品の購入などにあてられるというパターンを指している。つまり、夫のいる回答者の80%以上は、実質上の経済的な「太黒柱」である。Rao [1996 25]がブノンペンのインフォーマル・セクターで働く女性を対象にして行った調査では、男性世帯主世帯の内、13.1%は女性が唯一の稼ぎ手であり、40.9%は女性が世帯収入の80%以上を稼ぎ、女性が世帯収入の半分以上を貢献しているのは、78.8%であった。Raoの調査は、世帯収入への女性の貢献度について報告しており、家計支出について聞いた本調査とは異なるが、それでも、女性が経済的に家庭に大きく貢献していることがRaoの調査でも本調査でも窺える。

その一方で、彼女たちの商売はあまり変わっていない。249人の回答者中、181人(72.7%)がはじめた当時から商

売の規模も形態も変えていない。商売を変えていない人は、拡大した女性よりも遅く商売をはじめており、商売の拡大は時間の問題とも取れるかもしれない²⁾。しかし、商売を変えていない回答者が小売業を始めた平均年が1987年であることからして、10年間多くの人が商売を変えず、また、拡大していないわけである。また、本調査は現在も商売をしている女性のみを対象にしているのも、もしもすでにやめてしまった人も含めると、商売を拡大した人の割合はさらに低くなる。

商売を始めることにより、女性の家庭での経済的貢献は増えた。表2からみてもわかるように、60%以上の回答者は、プノンペンに来てすぐに小売業をはじめている。すぐには小売業に参入していない人のほとんどは小売業をはじめる前は専業主婦であったか、生徒・学生で、現金収入はなかった。従って、小売業を始めることで、初めて家庭に現金収入の形で貢献をしているわけである。このような経済的貢献が増えることで、女性の家庭内及び社会における地位はどのように変わっているであろうか。

(3) カンボジア女性の地位

カンボジアの女性は、古くから比較的高い地位を家庭内でも社会でも占めてきた[Ebihara 1968, Martin 1989]。Ebihara [1977] は、13世紀のカンボジアにおいて、女性が天文学者や判事などの地位についていたことを指摘している。また、彼女の1960年代カンボジア農村での調査でも、夫婦は比較の平等な関係にあるという観察をしている。女性は離婚を切り出しても良いし、夫が出家するときは妻の許可が必要だったし、行動の自由があった。女性は財布のひもをにぎり、その経済的貢献と母系父系両方を重んずるカンボジアの伝統とによって、かなりの決定権を握っていた。

しかし、その一方で、Ledgerwood [1990] が指摘しているように、女性は常に夫に従うことが善しとされ、良き主婦であること、さらには貞節を守ることは大変重要なこととされてきた。女性の純潔を守ることは、男性の大切な責任義務のひとつであると考えられてきた。長年にわたる戦争と、ポルポト政権下における肅正、重労働や飢えの結果、成人男女の人口比にアンバランスが生まれ、1980年代には成人人口の60-65%は女性であり、全世帯の30-35%は母子家庭であった[Sonnois 1990 1]。男女比のアンバランスは、女性に独身で通すか、または重婚関係を承認するかを選択を迫り、その結果、女性の家庭内の力と地位は弱まったといわれている[UNICEF 1990 112]。Mysliwiec [1988 59] も、男性の数が足りないことは、男性が複数の妻をもつことを暗黙の内に社会に了解させてしまっているところがあると、指摘している。

カンボジアの女性は、一見家庭内や社会で影響力をもっているように見受けられるが、それは、決して男性と互角のものではない。そして、女性の経済的な貢献が増えても、その不平等な力関係、地位の低さは変わらずに維持されている。

本調査でこれが如実に見られたのが、家事の分担である。女性が一日中市場で物を売っていても、家庭では、依然として女性が家事を担っている。配偶者のいる回答者171人中、夫も日常的に家事を受け持つと答えたのは22人だけだった。例えば、市場で服を売っていた女性は、公務員の夫が昼食を作り、用意ができると食事に呼びにくるといっていた。また、ある茹でトウモロコシを街路で売っている女性は、シクロ(三輪自転車のタクシー)の運転手の夫は、夕方彼女が売りに行く時間になると帰ってきて、子供の面倒をみるという。しかし、どの場合でも夫の家事の役割はあくまで「手伝う」のであって、責任は女性にある。

表2 回答者のプノンペンに来て後小売業を始めるまでの職業^{*1}

	生徒・学生	専業主婦・家事手伝い ^{*2}	小売業 ^{*3}	その他 ^{*4}	合 計
商 店	3(10.7)	7(25.0)	15(53.6)	3(10.7)	28(100.0)
市場Ⅰ ^{*5}	17(22.4)	19(25.0)	38(50.0)	2(2.6)	76(100.0)
市場Ⅱ ^{*5}	8(15.4)	4(7.7)	36(69.2)	4(7.7)	52(100.0)
行 商 ^{*5}	1(1.1)	18(19.6)	70(76.1)	3(3.3)	92(100.0)
合 計	29(11.7)	48(19.4)	159(64.1)	12(4.8)	248(100.0)

*1 1979年以降の職業が対象。

*2 この内、4人は1979年以降、しばらく学校に行き、その後家事手伝いをしており、1人は公務員をしていたが、退職して家事手伝いをしていた。その他は、1979年以降、専業主婦・家事手伝いのみに従事。

*3 プノンペンに来てすぐに小売業をはじめたケース。

*4 政府役人、教師、国営企業従業員、また個人に雇われていたケース。

*5 表1を参照。

*無回答者数1。

*職業の内、「その他」を抜かして比較すると、カイ二乗検定で有意水準1%以下。

表3 回答者による子供の将来の希望職種と配偶者の職業

	配偶者のいる場合、その職業			配偶者なし 死別・離婚者	合 計
	公務員*1	自営業*1	その他*1		
公務員*2	41(75.9)	22(53.7)	39(73.6)	29(70.7)	131(69.3)
小売業*3	1(1.9)	7(17.1)	3(5.7)	1(2.4)	12(6.3)
子供次第	7(13.0)	10(24.4)	5(9.4)	5(12.2)	27(14.3)
息子は公務員*4	5(9.3)	2(4.9)	6(11.3)	6(14.6)	19(10.1)
合 計	54(100.0)	41(100.0)	53(100.0)	41(100.0)	189(100.0)

*子供がいる回答者のみ。

*1 表1と同じ。

*2 子供には将来公務員、または大企業への就職を望む。

*3 子供には将来小売業をついでもらいたい。

*4 息子には将来公務員になってほしいが、娘は小売業をすればよい。

*配偶者が公務員と自営業である場合に関して、子供を公務員にしたいか、小売業にしたいかで比較すると、カイニ乗検定1%で有意。

独立した収入が増え、家計への貢献が大きくなっても、それは家庭内での男女の役割を変えるところまでは到っていない。それどころか、配偶者の収入に頼ることができず、女性の収入が家計の大きなよりどころとなっていることは、女性に経済的プレッシャーをかけている。ある回答者(公設市場の衣服商人。未亡人)が言うには、「もしも男性が商売をしていれば(つまり、ある程度の収入があれば)、女性である方が男性であるよりも、楽だ。でも、もしもそうでなければ、女性である方が男性であるよりも大変だ」。後に述べるように、夫が公務員であることは、家族の社会的ステータス上大切だが、そうすることは、女性自身の経済的負担を増やすことになり、家計を支える義務の重さを考えると、夫に収入のある方が楽であるというわけだ。また、別の回答者(薬局経営。夫は公務員)によると、「男性は自分の仕事のことだけを考えている。うちにお金をいれるかどうかは、随意である。女性は毎日、子供たちに食べる物があるようにしておかなくてはいけない」。複数の回答者が、「うちの人たちが食べられるかどうかは、女性にかかっている」「女性の方が男性よりもいろいろ考える。女性は家族の将来のことも考えなくてはいけないが、男性は過去のことも将来のことも考えない」と言っていた。

女性が小売業を営むことで、その社会的地位も向上してはいない。商売人は、歴史的に常に社会的に低い地位にあった。Mabbett and Chandler[1995:173]によると、13世紀アンコール時代のカンボジア社会は、王族、貴族、自由農民、そして奴隷の階層から構成されていた。Ovesen et al.[1995]とThion[1993:96]は、基本的に、王族、官僚、農民の3つの社会階層からなっていたと言っている。この当時、商人は社会階層の外部に位置していた。大きな商売は中国人やベトナム人などの外国人が主に仕

切っていたが、零細小売業はクメール女性によって担われていた[Mabbett and Chandler 1995]。時代が下るとともに、商人も社会階層に組み入れられていく。大商人は、普通の公務員よりも高いステータスを占めるようになるが、零細な商人は、農民と同じステータスで、公務員全般よりも低い社会的地位を占めるようになった[Martin 1989]。この社会階層はポルポト政権下に一時壊されたが、その後、復活していることが、本調査でも観察された。

往々指摘されることであるが、本調査でも回答者は、公務員志向の強いことが示されている(表3)。子供のいる回答者の70%近くは、子供には公務員になってほしいと思っている。もっとも、カンボジアでは、正規雇用先は公務員に限られているといってもいい位なので、この公務員志向は少し割り引いて解釈した方がよいかもしれない。しかし、公務員であるということは、たとえ給料が少なくても、個人の会社で働いたり、自分で商売するよりも社会的なステータスが高いことは、回答者の次のようなコメントからも窺える。「商売人は、公務員ほど他の人たちから認められない」(公設市場のココナツ商人。夫は公務員)、「もしも、家族の中から公務員をひとりも出していなければ、他の人たちから、法律も何も知らないと思われて、軽んじられる」(雑貨商人。夫は公務員)、「あのうちは、誰も政府で働いていない。金持ちだが、近所の人たちはあまり尊敬しない」(ござ商人。夫は軍人)。つまり、女性たち、特に、以前は公務員だった女性にしてみれば、小売業に参入することにより、社会的地位は下がった事になる。また、一度公務員をやめて小売商になると、また元のような公務員に戻ることは、難しい。

女性たちは、限られた選択肢の中で小売業の商売を始め、自分の力量で自分の収入を得ることができているが、その一方で、彼女たちの経済的負担は増大しており、商

表4 自分の商売が成功していると評価している回答者数

	成功している	成功していない	合 計
商 店	14(60.9)	9(39.1)	23(100.0)
市場Ⅰ*1	68(90.7)	7(9.3)	75(100.0)
市場Ⅱ*1	48(92.3)	4(7.7)	52(100.0)
行 商*1	43(48.3)	46(51.7)	89(100.0)
合 計	173(72.4)	66(27.6)	239(100.0)

*無回答者数10

*1 表1を参照。

*カイ二乗検定 有意水準1%以下。

売も大きくなるわけではなく、収入が増えても家事の負担は減らず、また、社会的に低い地位を与えられ、そこから抜け出れなくなってしまうところもある。このように小売業を営むことが客観的には地位の向上につながっているようには思えないにもかかわらず、回答者たちは、大概自分たちの商売に満足している。回答者の女性たちに自分の商売について、どう思うか(満足しているか、成功していると思うか)を聞いてみると、回答者の78%は自分の商売に満足しており、72%は自分の商売は成功していると答えている(表4)。また、60%近くの回答者は商売をすることによって、自分の家庭内での地位が向上したと感じている。興味深いことには、商店で他と比べて大きく商売している女性は、市場で物を売っている女性よりも成功したと感じている人が少なく、また、どんなに零細でも、例えば行商していても、48%の女性が自分の商売は成功しているという評価をくだしている。

もっとも、これは一つ二つの質問に対しての答えであり、これをもってして回答者が自分の商売を肯定的に評価しているとは断定できないが、彼女たちが満足している、または成功していると考え理由は注目に値する。回答者たちが商売に満足または成功していると考える主な理由には、家族を養うことができるから、子供を教育することができるから、そして、商売をつぶさずにやっていけることができるから、などがあげられている。これらを更に掘り下げて聞いてみると、回答者たちの商売の評価に影響している要素はいろいろあるが、中でも、ここでは、特に二つの点を考察する。一つは、小売業を営むことによって、女性たちは家族及び社会から認められると感じていることである。もう一つは、女性の社会的地位は女性自身の社会的達成でなく、夫の達成によってはかられるので、夫の社会的地位を維持することが女性の商売の目的となっていることによる。以下、この2つの点について、カンボジアの女性観を焦点に論じていきたい³⁾。

3. 女性の商売を支える価値観

(1) スレイ・グロップ・レアク⁴⁾—カンボジアの女性観

小売業を営むことで、家族及び社会から認められる理由としては、第1に、それがもたらす経済力があげられる。特に、低所得世帯においては、この要因が強い。第2には、女性が家計に経済的に貢献することで、よりよく家計の切り盛りができるということである。カンボジアでは、伝統的に女性が財布のひもをにぎり、家計をやりくりする役目を与えられている。女性は、自分で収入を得ることで、この家計のやりくりがしやすくなり、よりよくこの役目を果たしているという意識が、家族及び社会に認められているという認識につながっているといえる。更に言うと、この役目の遂行は、カンボジアの理想の女性像に合致しているのである。

文化人類学者Judy Ledgerwood[1990]は、カンボジアの女性観についての研究の中で、カンボジアの理想女性のイメージは、スレイ・グロップ・レアク「完璧に有徳な女性」と称されることを指摘している。Ledgerwood[1990 103]は、スレイ・グロップ・レアクの特徴を次のようにまとめている。「有徳な女性は美しく、かつしとやかで愛らしく、無口で従順である。彼女は常に『自分よりも偉い』夫に対して、しかるべき敬意を払う。そして、このような美德をもつことにより、彼女は、夫の避難所、そして夫の力の源となるような安全で守られた家庭を作るのである」。

未婚のスレイ・グロップ・レアクは、処女であり、若い女性はできるだけうちの中にいるのがよしとされ、一人で遠くに行くことは言語道断である[Ledgerwood 1990 110]。良き主婦は、料理が上手で、家事の切り盛りにすぐれている[p.104]。

スレイ・グロップ・レアクのイメージは、このようなしとやかなものだけではない。矛盾するように見えるが、強く、賢い、やり手のイメージも一方ではある。スレイ・グロップ・レアクは、家事にすぐれているのみでなく、家族の経済的な繁栄をもたらしこともできるのである。Ledgerwood[1990 108]がスレイ・グロップ・レアクをよく反映させた話として引用している民話「穴のあいたかごの女」は、このようなやり手のイメージを示している。主人公の女性は、貧しい漁師の夫を助け、村有数の金持ちに仕立て上げている。彼女は働き者で、儉約家で、貧しい家庭を上手に切り盛りした。また、夫がたまたまみつけてきた高価な木の価値を見抜き、値段をつけ、積荷販売

し、他の商人にだまされない商才を発揮している。カンボジアのことわざ「稲の苗は、引き抜くと、土を根につけてくる」は、女性が男性の社会的出世を左右することを意味しているといわれている。土が男性で稲が女性であり、このことわざは、女性が男性を導くという意味であるとFisher-Nguyen [1994]は指摘している³⁾。

Ledgerwoodが描いたスレイ・グロップ・レアクのイメージは、1960年代とそれ以前の社会を研究した文献及び1980年代のカンボジア難民に生きる民話を基にしたものである。このような二重のスレイ・グロップ・レアクのイメージが現在のカンボジア社会にも生きていることは、回答者たちの受け答えの端々にうかがえる。ある回答者(独身の金商人及び公設市場の売り台で雑貨を売る、夫が軍幹部の女性)は、「以前(1960年代)は、女性は良き主婦であるだけで、『有徳』であると評価された。しかし、今は女性は良き主婦であるのみではなく、巧みな商人でもなければ『有徳』であると評価されない」と言っていた。また、公設市場の売り台でにんにくを売っていた女性(夫は警察官)は「市場で物を売っていると、しとやかで、物静かな理想女性であることができなくて残念だ。そんな態度をとってはいは、他の商人につけいられて、自分の売り台の領域を侵害されてしまう」と嘆いていた。自分の商売をもっている、家庭内での地位は変わらないと感じている女性の多くは、スレイ・グロップ・レアクの内、しとやかな女性のイメージを重んじていることが窺える。例えば、ある菓子の行商をしている女性(夫は建設労働者)は、経済的にどのような貢献をしていても、女性は男性の下にいるものだ。それが、カンボジアの伝統文化である、と筆者に強調した。

一方、商売をすることで、家庭内での地位が向上したと感じている女性たちは、スレイ・グロップ・レアクのイメージの内、家計をつかさどり、家族を経済的繁栄へと導く、やり手のイメージを意識している。家庭内での地位が向上したと感じている理由として女性たちは、次のようなものをあげている。「自分の商売があれば、何かを買うときに、いちいち夫の意向を気にしなくてもよい」(野菜行商人。夫は不法居住者地域のコミュニティー・リーダー)。「自分の独立した収入があれば、女性はもっと自由がある。夫や息子たちが何かほしいとき、買ってあげることができる」(公設市場の金商人。夫も以前は一緒に金を売っていたが、今は隠居の身)。「自分の収入があれば、うちの中での女性の権利は向上する。うちでは、私が夫にこづかいをあげる」(公設市場の雑貨商。夫は軍人)。ここで強調されているのは、

商売をすることによって、女性はもっと「自由」になるということだ。ここで気をつけなくてはいけないのは、この「自由」は、自分のためにお金を使う自由ではなく、家計をもっと自由に切り盛りできることを意味する自由である。また、商売をしているということは、働き者であると、家族や社会から認められることにもなる。せっせと働いて家族の経済的繁栄に貢献するのも、また、スレイ・グロップ・レアクの大切なイメージの一つである。「女性は、自分の商売があれば、夫の収入にのみ頼っている女性よりも、他から認められる」(商店で薬や雑貨を売っている女性。夫は一緒に商売をしている)、「自分の収入があれば、うちの人たちも私に対して何やかやと文句をつけない」(公設市場の雑貨商。夫は私企業に勤めている)などのような回答に、働き者であることの大切さが示される。また、親戚や近所の人に何か商売でもして家計の足しにするように勧められたことが、以前は専業主婦であった回答者たちに小売業を始めさせた理由の一つになっている。

このように、スレイ・グロップ・レアクに自分たちの経済活動が即しているという意識が、女性たちに、自分の商売が成功していると、そして商売をすることで家庭内での地位が上がると評価させる一助となっている可能性があると考えられる。

(2) 社会的ステータスの維持

もう一つ、女性が自分の商売を成功していると評価している理由として、彼女たちの商売の目的が、夫及び家族の社会的地位の維持にあることが考えられる。これは、特に公務員の夫を持つ女性にあてはまる。市場開放以降の急激なインフレの影響で、公務員の給料のみでは生活がなりたらず、夫婦ともに公務員あるいは夫が公務員で妻が専業主婦の家庭では、家族の内誰か一人が生活が成り立つだけの収入のある職につかなくてはならなくなった。この結果、特に市場開放以降、夫が公務員、妻が小売商という、以前にはあまり見られなかった就職のパターンが多くなった。このパターンが多いのは、市場の売り台で日用品や高級品を売っている、表1における「市場I」の女性たちだ。彼女たちは他の回答者たちに比べ、以前は専業主婦だったケースが多い(表2)。商店の女性も以前は専業主婦だったケースが多いが、彼女たちの夫は自分で商売している場合の方が公務員であるケースよりも多い(表1)。

家族の内、一人が公務員の職を保つ場合、男性が保つことが多いのは、ひとつには男性の方が、政府の中での

出世が女性よりも早いので、男性が公務員であることによって得られるメリットが多くなるからだ。夫が公務員であることによって、情報やコネクションの面で女性の商売にもメリットがあることももちろんである。あまり資金のかからない小規模な小売業を営む場合、女性が営む方が社会的に受け入れられやすいこともあげられる。男性に「ふさわしい」と思われている商売で、あまり多くの資金を使わずにできるものの多く(例えば鶏の仲買など)は、小売業と違って、時間的に公務員をしながらでもできるので、公務員をやめる必要もないといえる。

また、Larsson [1996 12] は、カンボジアでは「女性の社会的地位を決定する大きな要因の一つは、配偶者の社会的地位である」と指摘している。つまり、女性が社会的に高い地位についた場合に夫及び家族が受ける社会的評価に比べて、男性が社会的に高い地位についた場合に妻及び家族が受ける社会的評価の方が高い傾向にある。従って、特に公務員の夫をもっている小売商の女性たちは、夫に社会的地位の高い公務員の職を維持してもらうことが、家族及び彼女たち自身の社会的地位のためにも大切であると認識する可能性が高い。

表3をみてもわかるように、夫が公務員である女性たちは、子供もまた公務員にしたいと願っているケースが多い。このような家庭では、妻の商売は夫の公務員の職の維持と子供が公務員になれるように教育することが大きな目的の一つであるので、それが達成されれば、彼女たちは自分たちの商売は「成功」していると感じると推測される。

公務員の妻である小売業の女性たちは、自分が家計の大部分を支えているにもかかわらず、夫が家計に貢献していないとは考えていない。夫の貢献は、社会的ステータスなど経済外の貢献であり、この貢献は女性たち自身の経済的貢献と同じ位またはより大切なものとして認識されている。夫の仕事である公務員の職は、ほとんど家計費の足しにはなっていない。それでも、夫が公務員として働き続けるのは、公務員の家族というステータス維持のためにも、彼女にとって大切なことなのであろう。

まとめ

カンボジア女性は、古くから世帯の財政管理をまかされ、家庭内でも比較的大きな決定権をもってきた。市場開放政策とともに、苦しい家計を助けるために女性たちは零細な小売業に多く参入した。彼女たちは、自分たちの采配と才覚で、それぞれ自立して商売し、このような商売は、女性たちの独立収入を増やし、自信をつけさせた。

しかし、その一方で、女性たちの経済的負担は増えただけで、家庭内での男女の役割分担は変わらず、また、彼女たちは依然として社会的に低い地位にとどめられている。それにもかかわらず、女性たちに自分たちの商売に満足し、成功しているという評価を与えさせている要因の一つは、商売をして家族を経済的に、また、社会的ステータスの維持のために支えることは、カンボジアの女性観に即しているという認識であると考えることができる。

市場開放は、カンボジアの例で見ると、確かに女性に独立した収入を得る機会を与えている。しかし、既存のジェンダー関係については変えていないどころか、既存の社会的に期待された男女の役割分担を使って女性により重い経済的負担を強いているところがある。Brook and Luong [1997] が指摘しているように、「伝統的」価値観や「固有文化」の強調は、東及び東南アジアの資本主義下で、国民を抵抗なくグローバルな資本主義に組み入れる際にしばしば見受けられる。女性の労働力を経済成長に利用するにあたって、資本主義は女性の経済への貢献を奨励する「伝統」を強調するといえる。カンボジアの女性観も、女性の経済的貢献を推奨することで、カンボジアの資本主義化を支え、同時に、その経済活動が基本的な男女関係、女性の低い地位については、抵触しないようにしている「名称のない」力となって働いている。

<註>

- 1) 公設市場における調査は、大規模市場1ヶ所(売り台数約4400)、中規模市場2ヶ所(1ヶ所は売り台数約1322、1ヶ所は977)と小規模市場1ヶ所(売り台数約243)において行われた。大規模市場からは56人、中規模からは43人と38人、小規模からは31人が本調査のインタビューに応じた。
- 2) 商売を拡大した回答者の75.2%は、1989年の市場開放以降に拡大した。その意味では、市場開放は、女性の商売にとって拡大の機会を与えたわけである。
- 3) カンボジアの女性観は小乗仏教、及びヒンズー教の影響を強く受けている。本稿では、紙面の都合上宗教が女性観に及ぼした影響については論じない。
- 4) スレイ・グロップ・レカナと呼ぶ場合もある。
- 5) このことわざの解釈は、人によって異なるようだ。本調査でも、回答者によっては、このことわざを逆の意味合いに解釈していた。

<引用文献>

- Agarwal, Bina 1994 *A Field of One's Own: Gender and Land Rights in South Asia*. Cambridge University Press
- 天野直子「カンボジア:復興のための女性か? 女性のためになる復興か?」『アジア研ワールド・トレンド』No.6: pp40-42
- Aslanbeigui, Nahid, Steven Pressman and Gale Summerfield 1994 *Women in the Age of Economic Transformation*. Routledge
- Baden, Sally 1993 *The Impact of Recession and Structural Adjustment on Women's Work in Developing and Developed Countries*. Equality for Women in Employment: An Interdepartmental Project, Working paper, ILO Geneva
- Brook, Timothy and Hy V. Luong 1997 *Culture and Economy: The Shaping of Capitalism in Eastern Asia*. The University of Michigan Press
- Clement, Jennifer 1996 The Gendered Impact of Economic Reform in Vietnam, *Development Bulletin*, Vol.36
- Corner, Lorraine 1993 *Women, Men and Economics: The Gender-differentiated Impact of Macroeconomics with Special Reference to Asia and the Pacific*. Paper for UNIFEM Asia-Pacific Regional Program
- Ebihara, May 1968 *Svay: A Khmer Village in Cambodia*. 博士論文, Columbia University
- 同上 1977 *Khmer Village Women in Cambodia: A Happy Balance*, Carolyne J. Matthiasson(ed.) *Many Sisters: Women in Cross-cultural Perspective*. The Free Press
- Elson, Diane and Ruth Pearson 1984 The Subordination of Women and the Internationalisation of Factory Production, Kate Young, Carol Wolkowitz and Roslyne McMullagh (eds.) *Of Marriage and the Market: Women's Subordination Internationally and its Lessons*. Routledge
- Fisher-Nguyen, Karen 1994 *Khmer Proverbs: Images and Rules*, May M. Ebihara, Carol A. Mortland, and Judy Ledgerwood (eds.) *Cambodian Culture since 1975: Homeland and Exile*. Cornell University Press
- Haddad, Lawrence, Lynn R. Brown, Andrea Richter, and Lisa Smith 1995 The Gender Dimensions of Economic Adjustment Policies: Potential Interactions and Evidence to Date, *World Development*, Vol.33, No.6: pp881-896
- Larsson, Katarina 1996 *Country Gender Profile: Cambodia*. Asia Department, Sida
- Ledgerwood, Judy L. 1990 *Changing Khmer Conceptions of Gender: Women, Stories and the Social Order*, 博士論文. Cornell University
- Lukes, Susan 1974 *Power: A Radical View*. Macmillan
- Mabbett, Ian and David Chandler 1995 *The Khmers*. Blackwell
- Martin, Marie Alexandrine 1989 *Cambodia: A Shattered Society*, Mark W. McLeod 訳. University of California Press
- Mayoux, Linda 1992 From Idealism to Realism: Women, Feminism and Empowerment in Nicaraguan Tailoring Co-operatives, *Development and Change*, Vol.23, No.2: pp.91-114
- Mysliwiec, Eva 1988 *Punishing the Poor: The International Isolation of Kampuchea*. OXFAM, UK
- National Institute of Statistics, Ministry of Planning, The Royal Government of Cambodia 1998 *Report on the Cambodia Socio-economic Survey 1997*
- Ovesen, Jan, Ing-Britt Trankell and Joakim Ojendal 1995 *When Every Household is an Island: Social Organization and Power Structures in Rural Cambodia*. Sida
- Pelzer, Kristin 1993 Socio-cultural Dimensions of Renovation in Vietnam: Doi Moi as Dialogue and Transformation in Gender Relations, William S. Turley and Mark Selden (eds.) *Reinventing Vietnamese Socialism: Doi Moi in Comparative Perspective*. Westview Press
- Rao, Rajalakshimi Rama 1996 *Women in the Urban Informal Sector: A Case Study in Phnom Penh*. Urban Sector Group, Phnom Penh
- Razavi, Shahrashoub and Carol Miller 1995 *From WID to GAD: Conceptual Shifts in the Women and Development Discourse*. Occasional Paper, United Nations Research Institute for Social Development and United Nations Development Programme
- Sen, Gita 1996 Gender, Markets and States: A Selective Review and Research Agenda, *World Development*, Vol.24, No.5: pp.821-829
- Sonnois, Brigitte 1990 *Women in Cambodia: Overview of the Situation and Suggestions for Development Programmes*. Redd Barna-Cambodia
- Tanski, Janet M. 1994 The Impact of Crisis, Stabilization and Structural Adjustment on Women in Lima, Peru, *World Development*, Vol.22, No.11
- Thion, Serge 1993 *Watching Cambodia*. White Lotus
- UN/ESCAP 1995 *Macroeconomic Reforms in the Economies in Transition*, Development Papers No.18
- UNICEF 1990 *Cambodia: The Situation of Children and Women*. Office of the Special Representative, Phnom Penh
- Vickers, Jeanne 1991 *Women and the World Economic Crisis*. Zed Books
- Vickery, Michael 1986 *Kampuchea - Politics, Economic and Society*. Lynne Rienner Publishers

(くさかべ・きょうこ アジア工科大学院博士課程)